

国立病院がめざす新たなメディカルタウン

国立精神・神経センター国府台病院 神経内科
湯 浅 龍 彦

平成15年もあとしばらくで終わろうとしている。本年は年明けとともにイラク戦争一色で、気候も冷夏と暖冬、人心も気候も何かえも言われぬ変調をきたしているかのごとき一年であった。その中において国立病院療養所には独法化というねりが押し寄せてきている。しかし、これを受け止めるのは、ひとりひとりの英知と努力であり、あらたな独立法人化機構もその姿を現し、来るべき新しい時代に備えて準備着々と進んでいる。

政策医療19分野の中において、神経・筋ネットワークでは、原因がいまだ不明であったり、確固とした治療法もない神経難病を多く抱え、そこでは社会的な支援を待つ大勢の患者さん達を擁している。これらの人々に対して、独法化の波が決してあらたな苦難を与えるものであってはならないし、政策医療を待ち望む人々にとって、ぜひ有意義な改革であってほしいと願う。

わが国は未曾有の老齢化社会を迎えようとしている。まもなく4人に3人が65歳以上の社会も現実に差し迫っている。医療はどうなるのか、まして神経難病の医療環境がどう変化するのであろうか。希望よりも寧ろ気の重くなるような状況が脳裏をよぎるのは私だけではあるまい。そのような老齢化社会において、安心して医療を受けるには、現在のような施設への入院・入所に頼る医療だけではとても需要に応じきれものではない。叫ばれているように今後は在宅医療に大きな希望をつなぐべきであるとしても、現状ではそのバックアップ体制は極めて脆弱である。町ぐるみで医療福祉に取り組む新たな町造り、新たなメディカルタウン構想が求められる所以で

ある。

このメディカルタウンでは、町の中心に医療機関を配置する。入院を主な目的とするのではなく、患者さんや家族の相談センターと短期入院と処置が出来る程度の設備があればよい。町中に耐震・耐火構造の、モダンで安全な公共住宅を配置する。町全体にケアシステムを構築し、各地区に配置されたホームドクターが患者さんのお世話をし、医療を中心とした新たな産業も育成する。若者は日中、新市街の職場に出勤する。日中は元気なお年寄りがそうでない方の面倒をみる。町の中心に国立病院療養所があれば理想的である。

私が考えるメディカルタウンの要件とは、

- 経済中心（都市）から適当な距離を保ちながら、通勤圏内にある。
- 独立行政経済圏；人口2万位の町。
- 文化的歴史がある。
- 国立病院が中心にある。

現在多くの国立病院・国立療養所は市の中心から離れている。新たなメディカルタウン構想ではむしろそれが有利な立地条件となるであろう。

雑誌『医療』は今や57巻に達す極めて長い歴史と伝統を有する。来年度の国立医療総合医学会は当然の成り行きで見送りになったが、再来年度からはふたたび実施されることが決まっている。そのなかで、雑誌『医療』は休むこともなく、来年もこれまで同様に発刊される運びになっている。雑誌『医療』を支える母体が大きく変貌する中において、赫々たる伝統を営々と守り続ける雑誌が存在することは大きな安心であり、またこの雑誌に込められた諸先輩の願い、過去から未来への伝承と新たな挑戦が受け継がれるものと思われる。